

第 60 回(2011.11. 3 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座－「中東・アラブ社会 (8)」

イエスもムハンマドもユダヤ教徒だった(イスラム教)

キリスト教のイエスもイスラム教のムハンマドも、もとは同じくユダヤ教徒だった。ユダヤ教徒だったイエスやムハンマドがユダヤ教を否定した理由の大きなものは、ユダヤ教の「選民思想」があったからだと言われている。イスラム教では、選民思想すなわちユダヤ教は神から選ばれた民だけが律法を守ることで天国に行けるのだと独善的に解釈してしまったこと、またキリスト教は唯一絶対の神の存在を認めていながら、イエスを神の子と解釈してしまったこと、などが間違っていると批判している。だから、唯一の神アッラーがムハンマドに正しい神の教えを改めて伝えたのだとイスラム教徒は言う。

イスラム教は、正しくは「イスラーム」と言い、「ただ一つの神であるアッラーに絶対服従すること」という意味を持つ宗教で、この宗教を信じている人々を「ムスリム(服従するもの)」と呼び、世界全体では十数億人もの信者がいると言われている。イスラム教の根幹は「6 信 5 行」で、「6 信」とはアッラー、天使、啓典、来世、天命、預言者を信じることで、「5 行」とは信仰の告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼を行うことである、とされている。ムスリムの生活信条は、預言者ムハンマドの死後編纂されたコーラン(教典)と、「ハーディス(伝承)」という預言者の範例・慣行(スンナ)である。すなわち、ムハンマドの言動を真似ることが、人々の生活するうえで最も大切なことなのである。

中東に歴史が始まって以来、多くの民族がこの地を經由して東西にまた南北に移動して行った。中東は文明の十字路と呼ばれる所以だが、それにもなって幾多の帝国が興亡をくりかえした。その都度、民衆は為政者の部族神や、為政者自身を神として信仰・忠誠を強いられてきたが、ヘブライ人が出現するに至ってユダヤ教が発展していったのである。この宗教の特徴は「厳しい戒律を守り神を信じることによって神は民衆を守る」といった神と個人との契約であり、その間には何者も介在しない。そのことが、為政者の部族神に信仰を強いられてきた多くの民衆に支持された大きな理由のひとつであろう。

今からおよそ 2000 年前、このユダヤ教からイエスが出て、それまでの神と民衆との厳しい契約を改めた新しい契約、すなわちキリスト教がローマ帝国の庇護によってヨーロッパに広まった。その後 7 世紀になって、同じアラビア半島でユダヤ教からムハンマドが出て、イスラム教が出現したのである。

《閑話》 ムハンマドは預言者であって予言者ではない

ムハンマドは「予言者」だと思っている友人が多い。カリスマ的宗教指導者は予言するものという思いがあるからだろうが、ムハンマドは「予言者」ではなく「預言者」である。なぜなら自分が「予言」するのではなく、神の言葉を預かって民衆に伝えるからなので、あえて「預言」という言葉を使ったという。ムハンマドは西暦 570 年サウジアラビアのメッカ市に生まれた。ムハンマドの生い立ちは決して幸せではなかったらしい。彼は生まれる前に父を亡くし母も 6 歳のときに亡くなった。家はかなり貧しかったという。父の死後は祖父に育てられたが、祖父の死後は伯父のアブー・タリブに引き取られて、12 歳になるとシリア地方との貿易を教えられ、次第に優秀な商人となっていった。ムハンマドは 25 歳のとき 40 歳の裕福な未亡人ハディージャ・ビント・フウリドと結婚した。15 歳年上の彼女は同じメッカ市に住む商才に長けた女傑だった。こうしてムハンマドは裕福な生活を送るようになり、3 人の息子と 4 人の娘も生まれて家庭での生活にも恵まれ

たが、3人の男の子はすべて幼い内に亡くした。そのことも原因してか、彼は次第に人々の憎しみや争いなどについて深く考えるようになっていった。

西暦610年、40歳になったムハンマドは、ある夜、いつものように洞窟で瞑想していたが、天使ジブリール(キリスト教では大天使ガブリエル)が神のメッセージを持ってきてムハンマドに読むように言った。しかし、彼は文字を読めなかったので断ると、天使は神の言葉を伝えた。これが最初の啓示となったため、イスラム教ではこの夜のことを「布告の夜」と呼び、ラマダーン(九月の意味、断食月)の重要な日となった。

西暦614年、ムハンマドはメッカ市で布教活動をはじめた。「神はアッラーの他にはいない。アッラーを信じればあまねく平等に恵みが与えられるから、その恩恵に対する感謝とアッラーを信じるのが人間の義務である。そして、争いを止め、商業の独占を禁止して富を公平に分配し、社会的弱者を救うこと」などをうたえて、守らなければ世界は終末を迎え、最後の審判で人々は神に裁かれるだろうと説いたが、最も驚き、かつ反発したのは、商業の利益を独占していたムハンマドの一族であるクライシュ族で、言ってみればまさに身内からの裏切り行為だったから、ムハンマドは家に石を投げ込まれたり、井戸に毒を投げ入れられたりされるなどの迫害を受けた。

このように、イスラム教もキリスト教と同様に、その成り立ちからユダヤ教と深い関わりがあった。根は一つなのだが、それだけにお互いの反発が大きいのだと言えよう。

《閑話》 経典『コーラン』は各国語には翻訳されない

最近の日本のビジネスホテルなどでも、ヨーロッパのホテルのようにベッドわきのテーブルに『聖書』が置いてある。「イスラム教徒が使っている『コーラン』はないのか」と言った友人に対して、「おれは見たことがあるぞ。なんだかミズがのたうちまわったような文字で書いてあったぞ」と言った者がいたが、ほとんどのホテルには『コーラン』は置いてない。あったとしても日本語に翻訳した『コーラン』はない。「日本語に翻訳された『コーラン』の解説書的な本はあるが、教典としての『コーラン』はないのだ」と言うと、「おまえ、翻訳して出版したらいいぞ。なんでも他人に先駆けてやればもうかるぞ。ひと口乗せろ」などとバカなことを言いだす。「英語訳もないのだ」と言ったら、「うそおつけ！」と相手にしてくれないから困る。『コーラン』はキリスト教の『聖書』のように各国語で書かれたものはない。それは、別の言葉に訳したりすれば、そこに必ず人間の意図が入り込み、神の声が聞こえなくなるからという理由である。

余談になるが、中東で「コーラン」といっても通じない。正しくは「クルアーン」と発音する。この経典を、預言者ムハンマドが書いたと思っている友人が多いが、ムハンマドが亡くなってから書かれたものである。ムハンマドは政界・財界の立て役者から農民や物乞いにいたるまでの様々な人たちに会って布教活動した。ただ街角に立って演説をしたり、道行く人をとっつかまえてお説教したりだけでは布教活動は無理なことは当然で、悩める人々を相手に様々な話をしたり相談に乗ったりしたことだろう。特に悩める人々を対してはアッラーの啓示という形での確かな結論を与えたに違いない。それだからこそカリスマ性が強くなって、ますます人々は明快な結論を求めたであろうことは想像に難くない。

しかし、ムハンマドが亡くなって、弱まったアラブ軍団の結束のために伯父のアブー・バクルが後継者(カリフ)となったが、預言者ではなかったからアッラーの啓示が得られなくなり、これではアッラーと信者とを繋ぐ糸が切れてしまう。そこで3代目のカリフ・ウスマーンが書記たちに命じて、信者たちが覚えていたり、書き留めておいたりしたムハンマドの言葉を集めさせた。これらを整理し、内容を分析して本にまとめ上げたものが『コーラン』である。

内容は、預言者ムハンマドが布教を始めた西暦620年から亡くなった632年の間に、天使ジブリール(キリスト教では大天使ガブリエル)を通してアッラーからムハンマドが授かった言葉を集大成したものだと言われている。全114章、6,239節にもなっているが、似たような事柄が出てきて解釈が難しいものもある。それはムハンマドの死後に寄せ集めた資料や記憶によって作ら

れたものだから、多少重複していたり矛盾と思われるような記述があつたりするからなのである。

そもそもこの啓示は、天使ジブリールが文字の読めなかったムハンマドに詠うように読み聞かせたというから、コーランを読むときは独特の旋律をつける。そのため、『コーラン』は「読誦されるもの」という意味がある。アラブの子供たちは、小学校にはいると、まず『コーラン』を完璧に覚えさせられる。だから、登下校の途中で、小さな身体をことさら大きく揺すり、大声でコーランを唄うように唱えながら歩いている光景をよく見かける。これが非常にかわいい。この可愛い子供たちが大人になると、あのしたたかなアラブ人になるとは、とうてい信じられないのである。